

A

教育社会学は、その特質を単純に言えば、第一に「客観性」第二に「実証性」第三に「脱イデオロギー」の3つである。その中でも私は、第一の「客観性」に着目した。客観性とは、伝統的な教育学のように「こうあるべき」という理想や規範から考えるのではなく、「こうある」という現実から考えるものである。私の普段の生活と照らし合わせて考えてみたときに、どうしても客観的にとらえたり行動できていない部分のほうが多いのではないかと思った。何事も“物事はこうあるべきだから自分もこうでなくてはならない”と考えてしまいがちで重く捉えてしまうことが多い。そうではなく、今回の講義で学んだように現実からこうであるのだと考えることで気持ち的にも楽になるのではないかと思った。

また、教育的な見方の特徴は2つあり、1つは教育の高い理想や目標を掲げ、それに達していない教育の現実を非難すること。そして、もう1つは学校の授業だけに注目し、子どもたちが学校以外で学んでいることを軽視することである。このことから、私は、理想よりも現実から考えることの重要性和、学校や教師や子どもを取り巻く社会的要因に注目しなければならないことを学んだ。そして、教育の理想や教育改革への熱意が教育の現実を作り出すという。具体的には、教育は受け身でいるとその効果は小さく、主体的に関わることにより達成度が高まるのだ。最初に学校の授業で基礎的で汎用性のある知識をきちんと学ぶことが大事である。私たちの身の回りにはたくさんの情報があふれているが、個々で選択し、さまざまな学習や行動に結び付けていくことが大事である。

そして、学校制度は、政府の考えで人為的に変えることができるものだが、その制度変更が日本全体にいきわたり、その制度が実際にどのように教育現場で実践されるかは学校組織や教師の意識・授業、児童たちの心理や行動などそれらの相互作用にあるという。私は、今の学生制度が終わったとしても、そもそも学校や教師、そして児童の関係性が非常に大事であり、私自身が教師になったときにどのようにしたら良い影響を与えることができるかしっかり考えたいと思った。

B

教育社会学の実証的方法、つまり調査とは何か―社会理論的枠組みと、一定のパラダイムにのっとった方法論にそって集めた（質的もしくは量的な）データとその分析が必要で、社会事象として教育現場のリアリティを見た調査が教育社会学の実証方法であることを冊子Iから理解した。① 2つの変数の共変、② 時間的順序、③ 他の変数が一定ということが満たされた上での調査が基本である。また具体的には、調査テーマの設定、仮説の建築、調査票の作成、サンプリング、調査の実査、集計、分析という流れで調査・分析が行われていく。調査の手法として、次の3点気を付ける必要がある。何に役立つのか考えた仮説的な調査をすること。実際の間味が感じられるような集計や質問の仕方、分析・考察をすること。

量的・質的な調査を併用し現実を追求し、データだけではなく、自分の感覚と比較し、異なる場合は再点検をすること。

教育社会学は教育実践に役立つのかなど。—「教育的社会学」は教師のための教育社会学で、教育実践のための社会的条件を探ろうとするものであり、「教育の社会学」は教育・教育を取り巻く社会の仕組みを客観的に分析しようとするもので、実践には興味が薄い。実践の重要性も踏まえながら、教育の科学的研究に実践研究の問題点を認識している人もいたり、しかしながら、教育実践をしないわけではなく、一部の研究者は実践をしている人などもいて研究者によってさまざまな考え方があることを学んだ。教育社会学は学校生活全体（隠れたカリキュラムなども含めて）から学ぶ子どもの教育、内ではなく外から（地域、階層、文化等）教育を見て考察することで、教育目標（カリキュラム）に到達することができる。これらのことから考えると、即効性・ダイレクトに実践には結びつかないものの、教育社会学的視点で、調査し分析した結果を踏まえることで教育実践に役立つといえるのではないかと思う。

## C

教育は、伝統的なものと変わらなくなってきた面もあるが、昔から学び方や制度が全く一緒ということは当然ない。今まで受け継がれてきた伝統的な教育学（「こうあるべきだ」）もあるが、現実（「こうある」）と向かい合う中で日常的に出会う様々な教育問題を教育現象として捉え、客観的に見ていくことが社会学的な見方の1つであると学んだ。また「機能主義、葛藤理論、解釈理論、批判理論」という4つの見方がある。その中の「機能主義」について。どこの場、もちろん教育現場にも集団や組織があり、社会という大きなものがある。それらを維持しようとする見方があり、そして維持をするために個々の要素（行為）が必要な活動を果たす必要があるということがわかった。そして、それを実現するためにA（適応）、G（目標達成）、I（連帯）、L（緊張処理、パターンの維持）という4つの機能を上手く使うことが大切だということ。これら4つは相互に依存しどれか1つに力が注がればその他3つに注がれる力は減少するので、その結果A→G→I→Lという流れが出来上がると考える。授業資料の「この考えが少し古いと書いたのは、このように予定調和的に部分部分が全体の維持に奉仕するような見方は、現実には合わない場合も多いからです。」という文章は私も確かに正直言って、今の時代にこの手のものは汎用性がどこまであるかなんとも言えないと思った。だが、今でも全く使えない理論ではないはずなので、活用できるところは活用していきたいと思う。

教育社会学の実証的方法、調査は授業資料を読んでも「アンケート調査」というのが挙げられている。これは原因—結果の因果関係を明らかにしようとして実施することが多い。このように結果は原因に依存し、原因なしには結果は生じないものとなっている。これらが明確にわかるような方法を取ることが大切。

学校制度は学校によってやり方や実践されるかされないかなど、変わってくる。そんな学

校現場に入りながら教育の実践をよくするための手法などを提言したり教師の意識付けや養成したりする「教育社会学」は必ず教育実践に役立つものとなってくる。「どうすべきか」「どうすればいいか」といった価値や規範を考えることも大事になってくる。

難しくはあったが、今回や今までの回を通して、教育社会学について理解できたことは色々あったと感じた。

## D

今回私は、青い冊子の第一章を読んで教育社会学について理解したことをレポートにする。この冊子を読むまでは教育社会学は昔からあるもので教育者たちの間で必要とされてきた分野だと思っていた。しかし、伝統的な教育学や社会学から社会学の方法で分析する学問であるなら社会学の一分野でいいはずであると一つの学問分野として認めないという攻撃を受け、必死に戦っていたことを初めて知った。教育社会学が認められてからも、内部で論争があったりと教育社会学が確立するまでの道のりはそう簡単ではなかったことを学んだ。

次に、7の教科教育と教育社会学の関係についてである。ここでは教育社会学は、「外側の環境に目を向けてそれとの関係で学校の教育を考えてきた。」とある。これを読んで教育社会学の重要性を感じた。学校で行われる授業は、①教材②教師③教室④児童といった学校教育に必要な要素が入った場で行われるためとても重要な時間である。しかし、児童に身につく力や考えようとする時間は自分が興味を持って調べようと思ったものや本を読んでいる中、友人との会話の中で印象に残っているものがほとんどであると考えている。そのため、授業を中心に考える教育学だけではなく、その外側である地域や文化にも目を向けて授業などに取り入れるような形で、学校の教育を考えられる教育社会学はこれからも必要不可欠な存在であると思った。

これらのことから、教育社会学の必要性や歴史について学ぶことができた。伝統的な教育学のように「こうあるべき」という理想や規範から考えることも時には必要かもしれないが、「こうある」という現実から考える教育社会学がこれからの教育現場に必要なことを学ぶことができた。まだまだ教育社会学について知らないことがあるため、繰り返し冊子を読んで学びを深めていきたい。

## E

教育社会学について理解したことは、教育社会学の研究分野は、授業よりも学校の周辺や社会的な側面に重きを置いているという点である。

教育学と聞くと、まずは、教育の中核である授業が思いつく。実際、教育学関連の書籍を読むと、授業の方法論や教科教育等、授業に授業に関連する内容をよく目にする。他方で、教育学の中でも後発の教育社会学は、授業よりも学校の外側に目を向け、それとの関係から学校教育について研究している。例えば、社会的な階層や格差についてである。現代におけ

る社会問題のひとつに、貧富の差がある。富裕層は質の高い教育を受けることができ、また、受けられる教育の選択肢は幅広い。その一方で、貧困層は、家庭内において親の監督が行き届かなかつたり、ヤングケアラーに陥ってしまう子どもがいたりする。教育社会学では、このような社会問題と学校教育との関連について、鋭利かつ客観的に考察する。

教育社会学では、主に、教育の社会的な側面について考える。私は、社会の仕組みのひとつに教育があると考え、教育社会学的な視点は、学校教育をより良いものにしていくために必要な視点であると考え。

## F

教育社会学とは、教育は「こうあるべき」「こうでなければならない」という偏った観点からではなく、教育の現状を把握し、そこに対してどのようにアプローチをすれば改善できるのかなど、教育を社会学的な観点で客観的に考察するということが分かった。そして社会学とは、地域社会との関連、社会階層とのつながり、経済とのつながり、青年期の子どもの心理とのつながり、政治など幅広い研究分野がある学問であると理解した。また調査方法として、より現実性を求め、データを収集し分析し、疑問点と照らし合わせる方法があるとNo.9から学んだ。より正確性を求めるには量的調査と質的調査の両方を重視して行うことが大切だということも理解した。

それらから、教育における熱意や理想は抽象度が高く、あまり重要視されていないように考える。一方で価値観は重視されているのではないかと考える。コロナ禍において、多様な価値観が広まったためである。例えば、家で勉強するほうが集中できるや子どもの勉強を見て安心できる両親など、学習環境の価値観という点でも多様化がみられる。このような現状を客観的に考察していくことが必要になってきているため、価値観の扱い方としては重要度が高くなっているのではないかと考えた。

## G

私が印象に残っているのは、教育学と教育社会学の違いである。教育学が授業内容、技法を学ぶ学校教育の内側的な役割を担っているのに対し、教育社会学は学校教育の外側、地域社会などと教育の関係を扱っていることが分かった。私のような教育学部で教員を目指しているような学生にとっては教育学のような教員になるための確かな技術が学べる科目が重要視されがちである。もちろん私にとってもそれは同様だったし、何なら教育社会学を2年後期で初めて知った。青の冊子を読んだり、これまでの授業内容を振り返っての教育社会学についての印象としては教育学だけでは教師として必要な視点を見逃してしまうのではないかとということである。基本的に教員が児童生徒を見ていられるのは、学校に児童生徒が在籍している間だけであり、将来教え子がどのような仕事をして生活をしているのか知ることはなかなかできない。教師の仕事は子どもが学びを得るためのサポートをすることである。そして、何のために子どもが学びを得ているのかということを見ると、子どもが将

来社会を生き抜くための力を身につけさせるためなのではないか。また、これを知ったうえでどのように子どもにサポートをしていくのかを考えるためには教育社会学的考え方が重要になってくるのではないかと考えた

## H

教育社会学で理解したことは、組織というものは大切だけれどその場やその時代に合わせた教育をしていくことが大切だということだ。目的があり、学校というところに関わっているたくさんの人がいるから組織というものがあるけれど、その組織のあり方や学校の教育方法が常に同じだとしたら、時代に合わせて生きていくことは難しくなっていくと考える。例えば、以前学んだホームスクーリングというというのが海外ではある。学校に通学せず、家族などが勉強を教えていくという勉強方法だ。日本ではまだ実施されていないが、家庭の事情や学び方改革としてホームスクーリングというものが取り込まれ、この方法は昔からあったわけではなく、時代に合わせて勉強方法が変わってきた。また、新型コロナウイルスの影響でオンデマンド型の授業が組み込まれたことも時代に合わせた教育だと思う。今までは、対面で授業をすることが当たり前だと思われていたが、オンデマンドにすることで利点もたくさんあることに気づけたのも時代に合わせたからであると考え。対面授業に参加していてもただ座っている学生や寝ている学生、他の課題をしている学生など授業として意味がなくなってしまう授業も多々ある。そこをオンデマンド型にすることで、課題を出さなくてはいけないと思い集中して読み考えるので、記憶に残りやすく、有意義な時間になることもある。

このように私は教育社会学は、時代に合わせて教育をしていくことで、身になることが多いのだということを理解することができた。昔からこうだからと考え方を一つに固めず、その状況や時代に合わせて教育方法を変えていかなければ、今後役に立つことが少なくなってしまう、身になるべきものも身に付かなくなってしまうので、時代と共に考え方や教え方を変えていくべきだということ学んだので、私が教師になった時には、たくさんの情報を集めながら、その場に応じた教育方法を常に考え、教えていきたいと思う。

## I

教育社会学について理解したことは、教育社会学とだけ考えていると難しいと感じ、その中で授業資料や、冊子を読む事で細かくわかりやすく例えられていたことで、少しずつ理解ができました。社会と教育はつながりがあり、それをその時代背景により分析、研究していくことがあることがわかりました。社会と教育は別ではなく、教育を受けて社会へ出る。そのためには教育環境の中で小さな社会がありそれは、現に社会の縮図になるところもあると思います。教室が上手く機能しない（社会が機能しない）と言うことは、GAILの何か欠けている事にもなり、機能しない。それにはどうしたら良いか、何が足りないのかをGAILに分けて考えることもできると思いました。

また戦後から何十年と様々な時代の社会があり、その中でその社会に必要な教育がされてきたのも、社会教育学での研究でもわかり、今後も「こうなるべき」、「こうなってほしい」というものが文科省などから示され、その先に子ども、児童、生徒が生きていく社会秩序を維持していくための教育も含まれているのではないかと感じました。

教育をする側の人間はその時その時の社会の状況で柔軟な物の見方をし、またこれが正しいと決めつけず、「これで合っているのか？」など色々な側面を考えられることを身につけたいと考えます。

J

教育現象を社会的に考察するのが教育社会学と言われるが、教育社会学には教育学に近い「教育的社会学」と社会学に近い「教育の社会学」という2つの立場がある。「教育的社会学」は教師のための教育社会学で教育実践のための社会的条件を探ろうとし、「教育の社会学」は教育やそれを取り巻く社会の仕組みを鋭利に客観的に見ようとするといった2つの違いを学ぶことができた。教育社会学は地域社会と教育、社会階層と教育、経済と教育、青年期と教育といったように教育とその周辺分野との関係を扱い、学問として確立させてきている。教育を客観的にみることや、批判的に見るのが教育社会学の内容理解につながる。学生が学ぶ上では「人の善意を信じ、素直な優しい心を、大切に」することが重要であるということを改めて理解することができた。また、教育や子どもの現実をただ追認するのではなく、主観的な思い込みによって現実が生み出される場合もあるため、主体的に授業に関わることが重要であることと結びついている。児童が「主体的・対話的で深い学び」の考えの基、授業することによってより多くの場面で知識や技能を身につけることにもつながっているということを理解することができた。

K

教育現象を社会的に考察するのが教育社会学と言われるが、教育社会学には教育学に近い「教育的社会学」と社会学に近い「教育の社会学」という2つの立場がある。「教育的社会学」は教師のための教育社会学で教育実践のための社会的条件を探ろうとし、「教育の社会学」は教育やそれを取り巻く社会の仕組みを鋭利に客観的に見ようとするといった2つの違いを学ぶことができた。教育社会学は地域社会と教育、社会階層と教育、経済と教育、青年期と教育といったように教育とその周辺分野との関係を扱い、学問として確立させてきている。教育を客観的にみることや、批判的に見るのが教育社会学の内容理解につながる。学生が学ぶ上では「人の善意を信じ、素直な優しい心を、大切に」することが重要であるということを改めて理解することができた。また、教育や子どもの現実をただ追認するのではなく、主観的な思い込みによって現実が生み出される場合もあるため、主体的に授業に関わることが重要であることと結びついている。児童が「主体的・対話的で深い学び」の考えの基、授業することによってより多くの場面で知識や技能を身につけることにもつなが

っているということを理解することができた。

## L

教育社会学とは、教育を社会的に研究する学問だ。広い意味で言えば、社会的でなくても、文化人類学、経済学、政治学など、の学問とも関わって研究するものだ。教育社会学は、独立したものではなく、他の学問と関わっているものといえる。

伝統的な教育感の「勉強はこうあるべきだ」という考え方ではなく、データなどの客観的なものから、問題となっている原因とその結果の関係で、検証するものだ。教育社会学の特徴として、理想や主観、個人の感想などが入ってきて、伝統的な教育に近づいていっている。

教育社会学は、一言で説明できる学問ではないと思う。様々なアプローチ方法があり、教育社会学の考え方が時代によっても違うためだ。教育と社会の関係を傍観的にみる学問ともいうことができ、教育社会学の歴史や考え方を説明しなければいけない。これからの講義でもっと理解を深めていきたい。

## M

私は、冊子の第一章の「教育社会学とは」というところを読み教育社会学についての主に2つの点を理解することができたと思う。まず一つ目に、教育社会学には2つの立場があるということだ。1つは、教育的社会学。これは、学校という教育現場において教師のための社会学で教育実践のための社会的条件のことというそう。私自身この言葉を読んだときは、教育を学んでいくための社会知識の在り方を示しているのかと思った。要するに、教育現場に必要な、言動や行動を社会という大きな場に置き換えて考える立場で考えることなのかと思った。2つは、教育の社会学。これは、教育実践に関心が薄く、教育やそれを取り巻く社会の仕組みを客観的に見る立場のこと。この立場というのは、私が考えるに、まずは社会という仕組みに目を向けることが重要だと思った。社会の仕組みを客観的に見ることで、決まったものを見るだけではなく様々な視点から社会という幅広い分野見れ自分自身の視野を広くすることができるということなのだろう。視野を広くすることで、今までにはないような見方・考え方が生まれるきっかけを与えることができる。その結果として、そのものを利用してから教育実践を行うと児童や生徒に幅広い知識を身につけることが可能になるだろう。

次に2つ目としては、実証性の大事さという点だ。このことは、教育社会学だけではなくどの教科においても大切なものだと考える。ある物事に対して仮説や考察をしないで行うのとは行わないのとは天と地の差ほどの違いがあるだろう。そのためにも、何を行う上でも、結果が出た際には必ず仮説を立てることを意識していきたい。仮説を立てることにより自分の考えと実際のものでの比較ができ、自分自身の理解力を図ることができる。

このようなことから、私は教育社会学というのは身近なもので使い方次第によっては自分という存在の意味を少しでも変えてくれるものだと考えた。

N

人は考えることのできる生き物。だからこそ損得をいつも考え、差別意識を持っている。また、善意には裏があり、他者や社会よりも自分を優先にするのである。私だってそのような経験はもちろんある。しかし、考えることのできる人間という生き物だからこそ、私たちが生きている社会や状況に対して深く考え、人の善意を信じて、素直な優しい心を大切にできるといったようなことを教育社会学で学べるのではないかと考えた。

教育は時代によって変化するため、それに対応するためにはやはり教育学だけでは補うことができない。教育社会学では社会の中でどう生かされているか、社会の中でどうあるべきかを考えることができるため、教育社会学が必須であると考えた。

いじめ問題などを含め、教育社会学を実際に受講してきて、教育学でもなく社会学でもないものをなぜ学ぶのか疑問を持っていたが、社会と教育には深い関係があるのだという事を学んだ。

O

教育社会学の講義を受けて、まず、教育学との違いを理解できた。教育学は教育の理想像や教育とはどういうものなのかを学ぶが、教育社会学は教育を受けることによって社会に出たときにどう生かされているのか、社会の中でどうあるべきなのかを学ぶという違いを知ることができた。学校での教育だけで終わるのではなく、社会に出たときに今まで学んできた教育を生かしていくためにどうすればいいのかを考えることが教育社会学であると知ることができた。また、教育社会学は教育現象を社会的に考察するものだともいわれている。社会学は体験・統計・データなどを用いて分析し、解明するものである。教育現象を社会的に考察するという事は、例えばアンケート等をとって、現状を知り、どう改善していくべきなのかを考察したりすることなどがあげられると私は考えた。このように、教育社会学は教育学と社会学が合わさったものであり、特に社会に出たときに必要になってくることだと学び、知ることができた。今まで学んできたことを活かしていけるように頑張っていきたいと思う。

P

私は教育社会学の特質である、客観性と実証性について理解し、そのことについて述べる。ここでの客観性とは教育現場で伝統とされてきた「こうあるべき」という規範や理想から考えるのではなく、「こうある」という現実から考えるということである。つまり教育現場の実態と学校の周辺や学校の社会的側面との関連から教育のあり方を考えるということだ。例えば、高校でアルバイトをしたい生徒とあまり推奨しない教師側の立場で対立していたとする。教師としては生徒は勉学に励むというステレオタイプがあるが、生徒は経済的な影響で十分なお小遣いを貰えないため収入を得たり、今後の将来を見据えて社会勉強として



アルバイトしたいと思ったりしているだろう。社会と生徒の実態を見るという Reality のある視点から教師は指導していく必要があると考える。

その実態を知るために実証性、つまり調査を行うことが必要である。教育現場ではアンケート調査で行うことが多いが、自然科学に近い検証方法である原因-結果という因果関係があることが重要である。どのような原因が影響して結果つまり生徒の実態に結びついているかを明らかにしていくことが出来る。

## Q

私が、教育社会学について理解したことは客観性をとても重要視しているという点である。

例えば、生徒文化や学校に行くことの意味についてが挙げられる。生徒文化について、今まで自分がほとんど何も考えずに自然に作り上げてきた又加わっていた文化的行動について集団の中から主観的に考えるのではなく、この文化はなぜ構成されてきたのか、教師の介入は必要なのかなど生徒でもなく、教師でもない視点から考えることで本当の意味について考えられることが社会学的視点であり大切だと感じた。

学校に行くことの意味として、疑いもせず小学校・中学校・高校と進学してきたため、学校に行って勉強する以外の方法を知りもしなかった（ホームスクーリングなど）。だが、学校教育のメリット・デメリット、その他教育方法のメリット・デメリットなど本当に子どもたちのにとって良い物はなんなのか客観的に判断しなければいけないと感じた

これらの点から社会学を含めて考える教育社会学には客観性が必要であり、過去の慣習などに囚われては行けないと理解した。

## R

「機能主義、葛藤理論、解釈理論、批判理論」この四つの考え方に私なりに解釈したことを書きます。AGIL を私がやっている部活に当てはめてみると A の機能では公認の部活動なので活動する場所は確保できている。次に G の機能は部活を存続するために自分たちが目標を立てて活動ができている月とできていない月があるので改善しなくてはいけない問題である。また、I の機能のみんなが仲良しというのが全くできていないので仲も縮めることができなかつたので後半になればなるほど人が集まりにくくなっていった。最後の L の機能は不満や緊張が解消される場も作れていないので今後の活動をよくするためにも機能主義を意識して活動をしていきたい。もっと多くの人が集まって楽しい活動をしていきたい。IL の機能が無いが一応存続はしているので改善点がどんどん出てくるし、世代交代などいろいろな問題も出てくるので一概にこれが原因か分からないが、もっと飲み場を増やしてもいいのかもしれない。コロナウイルスが広まって新歓などもやったこともないので新しいことにも手を出していくことも必要と考える。この考えはどの理論に入るのかは私にはわかりませんが学校をよくしていこう、クラスをよくしていこうと同じように部活

を心から楽しめるように運営をしていきたい。

S

青い冊子の第1章を読み、教育学が教科などの授業を中心に研究しているのに対して、教育社会学はその外側の地域や文化等の環境に目を向け、それとの関係で学校の教育を考えていることがわかった。また、教育社会学には2つの立場があり、1つは教育学に近い「教育的社会学」、もう一つは社会学に近い「教育の社会学」であることを学んだ。青い本には後者は学ぶと人が悪くなると言われたことがあると書かれていたが、教育社会学の講義を受けていてその様に感じたことがなかったため、どの様なことでそう感じたのか知りたかった。また、現在私が受講しているのはどちらであるのか考えたが、教育実践に関心が低いとは感じなかったが後者なのではないかと考えた。教育に関する問題を現代社会の状況などを踏まえながら考えているところでそうなのではないかと考えた。

S

教育社会学は教育実践において欠かせないものであると考える。教育社会学とは、教育事象を社会学の手法を用いて明らかにする教育学と社会学の中間に位置する学問分野である。教育現場において、児童の実態を知るということは絶対的に必要なことである。そして、それが社会の実態とどう絡んでくるのかを知っていなければならないと思う。例えばジェンダーについて。昔はジェンダー理解があまりなかったように思うが、今日ではたくさんの理解が生まれて工夫なども施されている。このことを踏まえて、教育現場でもジェンダー教育をしたり、学校の施設に工夫を施さなければならないと思う。逆を言うと、社会について知らなければ教育現場での実践というものは何も出来ないはずである。これらのことから、私は教育社会学は教育実践において欠かせないと考える。

T

教育社会学の授業を通して、教育社会学とは何か理解することができたと思う。まず、教育社会学は、戦後に講座ができた新しい分野で、教育学の主流とは言えないが、いろいろな見方や立場があるが、学校などの組織や集団やその文化に焦点を当てて、教育現象や個人の社会心理を解明しようとするものだとして武内先生は見ている。

教育社会学の特質としては、客観性、実証性、脱イデオロギーの3つである。しかし、近年では学問の確立とともにこの特質は薄れてきて、理想や規範の重視、主観や感情の重視など、伝統的な教育学と変わらなくなっている。教育社会学は教育と社会との関係を担う分野だが、人の社会科に焦点を置くか、居王郁の社会的機能に焦点を置くかで、そのアプローチも違っており、個人の社会学などマイクロなことは他の分野で、教育の制度やどのような教育の社会的機能を果たせばよいのか考えるべきだとされている。

教科教育と教育社会学の関係としては、教材、教師、教室、児童・生徒といった学校教育を構成する主要な4要素、学校教育の中核で一番重要な部分教育学で研究するものとなって

いる。また、教育学との違いとしては授業の外側の環境、地域、階層、文化等に目を向けたものとなっている。

このことから、教育社会学は世の主流に対しては懐疑的、批判的なスタンスを取りがちな学問の性格からきているとされる。しかし、教育社会学があるからこそ戦後から現代までの教育方法は日々発展していると思うし、今後も教育社会学ならではのデータの取り扱いによって良い学校教育ができると良いと考える。

## U

教育社会学の講義を受けて、まず、教育学との違いを理解できた。教育学は教育の理想像や教育とはどういうものなのかを学ぶが、教育社会学は教育を受けることによって社会に出たときにどう生かされているのか、社会の中でどうあるべきなのかを学ぶという違いを知ることができた。学校での教育だけで終わるのではなく、社会に出たときに今まで学んできた教育を生かしていくためにどうすればいいのかを考えることが教育社会学であると知ることができた。また、教育社会学は教育現象を社会学的に考察するものだともいわれている。社会学は体験・統計・データなどを用いて分析し、解明するものである。教育現象を社会学的に考察するという事は、例えばアンケート等をとって、現状を知り、どう改善していくべきなのかを考察したりすることなどがあげられると私は考えた。このように、教育社会学は教育学と社会学が合わさったものであり、特に社会に出たときに必要になってくることだと学び、知ることができた。今まで学んできたことを活かしていけるように頑張っていきたいと思う。

## V

私は教育社会学とは教師や親との相互行為が行われる社会関係との教育（社会としての教育）、また教育と社会全体との関係に着目して教育に対する社会からの影響、教育の社会に及ぼす影響を明らかにしようとしているものと理解した。例として家庭教育におけるしつけ、学校の授業における教師と子どもの関係、個々の教育事象を取り上げ、学力社会、情報社会、少子化社会などの社会構造や教育との関係を取り扱い過度の受験競争、イジメ、不登校、引きこもり、少年犯罪などの教育問題も研究対象になっていることを知った。教育社会学ではあくまで社会の仕組みの中でなかで起こる現象を客観的に捉え、人間と教育、社会と教育の関係を明らかにし、それぞれ互いにどのような影響を与え、教育や社会、人間にどのような変化をもたらすのか分析する学問だと私は理解した。社会学では個人と個人、集団と集団、社会生活の中で人間同士の在り方や社会の仕組みを探るものだと私は捉えた。教育社会学は教育や調査の仕事に就くうえでとても重要になってくる。それに限らずより広いさまざまな社会的な場面でも意味あるものとなる。教育という現実への関心と、データを集めて、自分の思い込みや社会通念がほんとうに正しいのか、現実と対話し虚心坦懐に確かめていくという往復作業を経験し自分鍛えることはいいことでデータを見ていくと、思い込み

や「常識」に修正を迫られることがとても多い。歴史を振り返ったり、他国との比較をすることができれば、自分がいま生きているこの社会のあり方を相対化することにつながる。さらに、現実を把握するだけでなく、もう一段階抽象度を高めて、これまでに構築されてきた理論や概念を駆使して、解釈を与えていくことも重要である。。教育社会学は複雑な構造があるゆえに、現実への関心と、実証的な検証、理論的な解釈という、三つの軸の間を、大きく旋回しないとイケない。これを実践して身に付けることは、もちろん直接的には教育や調査に関わる仕事に就く上ではとても重要ですし、それに限らず、より広い様々な社会的な場面で意味があることだと考えた。

## W

私は教育社会学は教育実践に役立っていると思う。何故なら私は時代が進めば教育の方法、考え方は変化するものであり、時代が進むということは社会が変わる。社会が変わればその影響が子供の生活や家庭に影響することが想像すれば見えてくる。教育社会学は教育事象を社会学の手法を用いて明らかにする教育学と社会学の中間に位置する学問分野であり、社会制度や個人の経験が教育制度やその成果に与える影響を研究する。家庭と社会の密接な関係、人と社会の関係は切っても切れない。そのため教育社会学はとても研究する価値のある学問だと私は感じる。

教育とは人に知識や技術を伝える、教えるのものである。教育こそが人間が人間たる一番の理由だ。後世に伝える文化こそ繁栄の理由であり、これからも社会で生きるには教育は全ての人間に等しく行われるべきだ。また社会とは人と人の繋がり最大の値だ。1人で生きることが難しい我々人間にとって社会とはとても重要な役割をもっている。社会学は社会を研究する学問で、ここでいう社会とは人と人との関係が組織化、制度化されたものを指す。つまり社会学は基本的には、人間と社会との関係を含むすべてのテーマを研究対象にしている。しかし教育社会学は社会学の手法を利用して学校や教育に与える影響を考える。これを行うことで時代が進んだ時に子供たちに必要な学習はなんなのか準備ができる。子供に必要な知識技術を与えるためにも、リスクヘッジなどの役割も教育社会学にはあると考える。以上の理由から私は教育社会学は教育実践に役立っていると思う。

## X

私は、冊子の第一章の「教育社会学とは」というところを読み教育社会学についての主に2つの点を理解することができたと思う。まず一つ目に、教育社会学には2つの立場があるということだ。1つは、教育的社会学。これは、学校という教育現場において教師のための社会学で教育実践のための社会的条件のことというそう。私自身この言葉を読んだときは、教育を学んでいくための社会知識の在り方を示しているのかと思った。要するに、教育現場に必要な、言動や行動を社会という大きな場に置き換えて考える立場で考えることなのかと思った。2つは、教育の社会学。これは、教育実践に関心が薄く、教育やそれを取り巻く

社会の仕組みを客観的に見る立場のこと。この立場というのは、私が考えるに、まずは社会という仕組みに目を向けることが重要だと思った。社会の仕組みを客観的に見ることで、決まったものを見るだけでなく様々な視点から社会という幅広い分野見れ自分自身の視野を広くすることができるということなのだろう。視野を広くすることで、今までにはないような見方・考え方が生まれるきっかけを与えることができる。その結果として、そのものを利用してから教育実践を行うと児童や生徒に幅広い知識を身につけることが可能になるだろう。

次に2つ目としては、実証性の大事さという点だ。このことは、教育社会学だけではなくどの教科においても大切なものだと考える。ある物事に対して仮説や考察をしないで行うのとは行わないのとは天と地の差ほどの違いがあるだろう。そのためにも、何を行う上でも、結果が出た際には必ず仮説を立てることを意識していきたい。仮説を立てることにより自分の考えと実際のものでの比較ができ、自分自身の理解力を図ることができる。

このようなことから、私は教育社会学というのは身近なもので使い方次第によっては自分という存在の意味を少しでも変えてくれるものだと考えた。

## Y

私は冊子の第一章「教育社会学とは」を読み、特に「7 教科教育と教育社会学の関係」と「10 教育社会学研究者の社会的貢献」が特に印象に残った。

7の「児童・生徒が学校で学ぶことは、教師が教え導く授業の場だけでなく、学校生活全体からや教師が意図しないことから学ぶことが多い。」という文から、教育学は、授業や教材に焦点を当てているが、社会学はその周辺にある地域や、文化に焦点を当てていることがわかった。実際に授業からも学ぶことはもちろんあるが、子どもたちが印象に残るのは、地域に足を運び体験型の学習を行った時や、修学旅行などで文化に触れる体験をした時である。黒板に向かい合い、ただ椅子に座って授業を受けるだけではなく、外側の環境に触れることで、さらに学びが深まるのである。つまり、教育学と教育社会学は切っても切れない関係なのだと考えた。

10では、「教育社会学はデータを扱い、データや実際の事務の処理には得意なので、大学の実務を担当する副学長に就く人は少なからずいる。しかし学長になる人は少ない。」という文が書かれていた。それは、7にも書いてあるように、「教育社会学は学校というお城の外堀を埋めるもの」という意見に繋がっているのではないかと考えた。しかし最後に、「目指すものは天守閣」と書かれており、学校の中心そのものに繋がるといことなのかな、と疑問に感じた。社会にはさまざまな職業があり、それぞれ貢献している分野は違う。どの職業に就くかでかなり人生が左右されてしまうなと感じた。

## Z

人は考えることのできる生き物。だからこそ損得をいつも考え、差別意識を持っている。また、善意には裏があり、他者や社会よりも自分を優先にするのである。私だってそのような経験はもちろんある。しかし、考えることのできる人間という生き物だからこそ、私たちが生きている社会や状況に対して深く考え、人の善意を信じて、素直な優しい心を大切にできるといったようなことを教育社会学で学べるのではないかと考えた。

教育は時代によって変化するため、それに対応するためにはやはり教育学だけでは補うことができない。教育社会学では社会の中でどう生かされているか、社会の中でどうあるべきかを考えることができるため、教育社会学が必須であると考えた。

いじめ問題などを含め、教育社会学を実際に受講してきて、教育学でもなく社会学でもないものをなぜ学ぶのか疑問を持っていたが、社会と教育には深い関係があるのだという事を学んだ。